

二月の最初の午（うま）の日を初午<sup>はつうま</sup>と言ってお祝いを致します。

これは稲荷山<sup>いなりやま</sup>（伊奈利山）にある京都伏見稲荷大社<sup>いなりやま</sup>が和銅四年（七一一年）の二月の初午<sup>はつうま</sup>の日に創建されたという言い伝えに由来しています。創建者である秦氏<sup>はた</sup>は大陸から農業に関わる先進技術を伝え、農作物、特に米の生産向上に貢献したとされています。そこから秦氏の信仰<sup>うじがみ</sup>していた氏神<sup>うじがみ</sup>を五穀豊穡の神として祀るようになりました。

祀られている神様は「うかのみたまのかみ」（宇迦之御魂神）と言います。一般には伏見大社のある山のことを稲が生じると書いて「いねなり」と呼んだことから始まり、後に稲の荷と書いて「いなり」と読むようになり、現在では親しみを込めて「おいなりさん」と読んでいます。

しかし「おいなりさん」と言えば馬（午）ではなく、狐ではないかと考える方も多くいらっしゃるでしょう。昔はこの神様が馬に乗って現れるという伝説もあったようであたかもお盆の行事を連想させます。また初午の午は時間でいえば正午、方角でいえば南ということもあり、太陽に代表される「陽の気」が最も強く働くところでもあり、生命力の向上にも一役買っています。

一方、狐の方はむしろこの「おいなりさん」の使いとしての役割を担っています。狐は元々「ケツネ」と言われ、食べ物の根元、食べ物を与えてくれる先祖という意味を持ちます。気候が暖かくなると山里に姿を見せる狐の姿は、その神秘性とも相俟って山から降りて来る神様の使いとして、考えられていたのです。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

さて、この初午の日は現在二月の行事ですが、元は旧暦の二月、現在で言えば三月初旬に当たります。これから迎える田植えの時期にその年の豊作をこの「おいなりさん」に祈る初午の行事は農耕と密接に結びつくのです。

更にこの「おいなりさん」は、仏教ともご縁を結んできました。平安時代に空海くわかいが建立した東寺に由来すると言われる密教の守護神「ダーキニー」という女神は神仏習しゅうごう合の考えのもとでお稲荷様と同一視されるようになりました。

荼枳尼天（だきにてん）と呼ばれ、荒ぶる女神ではありますが、信心深く敬えば御利益ごりやくも大きいと考えられたことから五穀豊穰の神様としてのみならず、商売繁盛や各種の産業興隆の神様としても信仰を集めるようになりました。曹洞宗でも愛知県の豊川稲荷はその代表格でありましょう。

このような経緯しんどうを経て神道のみならず仏教とも関わり合いを持ち、信仰されている「おいなりさん」。山の神として鎮座してはいますが、馬や狐を通じて私達の身近にその姿を垣間見せてくれているのだとすれば、私達も神様の使いとしての動物たちに注ぐまなざしを忘れないようにしたいものです。

— 終 —